

教員養成課程の学生からみた小学校英語の評価

島谷 浩*・岡崎 伸一*

Evaluation of Elementary School English from the Viewpoints of Teacher Training Course Students

Hiroshi SHIMATANI and Shinichi OKAZAKI

(Received August 31, 2022)

Abstract

This paper reports results of the survey on the evaluation of elementary school English. The survey was delivered to the teacher training course students who took a class named *Teaching Elementary School English* in the spring term, 2022 at Kumamoto University.

Findings show that the teacher training course students' main concern is put on the evaluation of positive attitudes toward English communication while they tend to avoid evaluating students' ability to use English communicatively probably because they are not sure of their own English ability to communicate.

Key words : evaluation, elementary school English, teacher training course students

1. はじめに

平成29（2017）年改訂小学校学習指導要領（文部科学省，2018）により，小学校に「外国語」（英語）が教科として導入されたが，明確な評価方法が確立されていない状況で，平成31（2019）年度から先行実施され，令和2（2020）年度に完全実施となった。教科となった「小学校英語」の評価には，他教科と同様に「評定」がつくことになったが，教科としての英語の指導に不慣れな小学校教員による不適切な評価が児童の学習意欲をそこなうことが懸念された（島谷，2018）。

現在の小学校教員のほとんどは，教科として英語を指導し評価することが想定されていないが，これからの小学校教員は，教員養成の段階で教職科目の履修を通して，小学校での英語を指導するための指導法を学ぶことになっている。熊本大学教育学部では，平成31（2019）年度入学者より，小学校教員免許取得の要件として，教職科目2科目（「小学校英語」と「初等英語科教育」）の履修を必修としている。

本稿は，令和4（2022）年度前期に，小学校英語の教職科目を履修した教員養成課程の学生が，小

学校英語の目標と評価をどのように見ているか，また小学校教員志望の学生の不安を調査することにより，将来の小学校英語の指導と評価への影響を探り，より望ましい小学校英語教育の実現に向けての提言を行う。

2. 問題の所在

平成23（2011）年度に必修となった小学校の「外国語活動」は，知識や技能の習得を目標としておらず，観点別評価を総括した評定を出さなかった（文部科学省，2008）ため，評価について明確な基準がなくても大きな問題にはならなかった。平成29（2017）年に公示された学習指導要領により，小学校に「外国語」が教科として導入されることになったが，2019年度から先行実施された段階では「外国語」の評価方法の詳細は明示されていなかった。2020年度に完全実施となったが，国立教育政策研究所教育課程研究センター（2020）が示した『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 小学校外国語・外国語活動』を完全に理解して日常の指導と評価に取り組むのは非常に困難で，多忙を極める小学校教員には悩みの種になっているようである。現在の教員ばかりでなく，これからの小学校教員が持つ小学校英語に対する目標と評

* 熊本大学大学院教育学研究科

価に対する潜在的な意識が、文部科学省が目指している小学校英語教育の実現に大きな影響を与えられていると思われる。

3. 方法

3.1 調査目的

本調査の目的は、将来小学校での英語教育を担うことになる小学校教員免許の取得を目指す教員養成課程の大学生を対象に、小学校英語教育の目標と評価に関する意識を調査することにある。また、小学校教員志望の学生には、小学校英語の指導と評価に影響を及ぼす不安要因について調査する。

3.2 調査対象者

本調査の対象は、熊本大学教育学部に在籍する学生のうち、小学校教員免許の取得を目指して「初等英語科教育 A」を受講した93名の学生である。熊本大学では、小学校教員養成課程の学生が主専攻として小学校免許の取得を目指す。中学校教員養成課程の学生も副専攻として、小学校免許の取得が可能である。

学部3年生のおよそ半数が前期に「初等英語科教育 A」を受講し、残りの半数が後期に「初等英語科教育 B」を受講することになっており、本調査参加者は、2020（令和4）年度の前期に、本論文執筆者2名が指導した「初等英語科教育 A」を履修した小学校教員養成課程の69名と中学校教員養成課程の24名の合計93名の学生である。中学校教員養成課程24名の所属は、国語科9名、社会科1名、音楽科2名、美術科5名、英語科7名であった。

3.3 調査方法

熊本大学教育学部において「初等英語科教育 A」を履修している学部3年生に、アンケート調査を実施した。学生は、最終クラスの講義の終了後に、Google Forms を介して無記名で回答した。

アンケートの調査項目は次の通りである。

- Q1. 性別 ① 男性 ② 女性
- Q2. 養成課程 ① 小学校教員養成課程 ② 中学校教員養成課程
- Q3. 希望進路 ① 小学校教員 ② 中学校教員
③ 高等学校教員 ④ 教員以外
- Q4. 小学校英語が教科となった意義についてどう思いますか？

- ① 全くない ② あまりない ③ 少しある
④ 大いにある

Q5. 小学校英語の目標として、重視するものは何ですか？（複数回答可）

- ① 英語コミュニケーション能力（特に聞くこと・話すこと）の養成
② 英語コミュニケーション能力（特に読むこと）の養成
③ 外国語への慣れ親しみを増す
④ 異文化への理解を増す
⑤ その他

Q6. 児童の英語を評価する際に、最も重視するのは何ですか？（自由記述）

Q7. 小学校教員を希望している人のみ教えてください。

1. 小学校英語に積極的にかかわりたい気持ちがありますか？

- ① 全くない ② あまりない ③ 少しある
④ 大いにある

2. 小学校英語の指導に不安を持っていますか？

- ① 全くない ② あまりない ③ 少しある
④ 大いにある

3. 指導に不安を持っている場合、どのような点に不安がありますか？（自由記述）

4. 結果

4.1 調査回答者

調査対象者93名のうち、71名（男性21名、女性50名）から回答を得た。回答回収率は、76.3%であった。回答者のうち、小学校教員養成課程の学生が55名、中学校教員養成課程の学生が16名であった。小学校教員養成課程の学生の回答回収率は79.7%（69名中55名の回答）で、中学校教員養成課程の学生の回答率は66.7%（24名中16名の回答）であった。

調査回答者の希望進路は、小学校教員が40名（56.3%）、中学校教員が14名（19.7%）、高等学校教員が3名（4.2%）、教員以外が23名（32.4%）だった（7名が複数の進路の回答をしている）。

4.2 教科としての「外国語（英語）」導入の意義

調査対象者全員に尋ねた小学校英語が教科として導入された意義についての質問については、表1が

示すように、「大いにある」が50名(70.4%),「少しある」が18名(25.4%),「あまりない」が2名(2.8%),「まったくない」が1名(1.4%)であった。

表1 教科としての小学校英語導入の意義

	大いにある	少しある	あまりない	全くない	無回答
人数	50	18	2	1	0
%	70.4	25.4	2.8	1.4	0

調査回答者のうち68名(95.8%)が、教科としての「外国語(英語)」の導入の意義を認めている。調査対象者は、平成20(2008)年改訂小学校学習指導要領(文部科学省,2008)により必修となった「外国語活動」を、小学校5年生、6年生の時に履修しており、小学校で英語を学ぶことに対して抵抗がないようである。

また、中学校・高等学校教員志望者の全員が、小学校英語導入を肯定的にとらえていた。副専攻で小学校教員免許を取得を目指している中学校・高等学校教員志望者の全員が、小学校英語の意義を認めている点は、これからの小・中連携に期待を抱かせる結果と言えるかもしれない。

教科としての小学校英語の導入に否定的な意見を示した3名(5.2%)のうち、「あまりない」「全くない」と回答した2名は教職以外へ進路を変更しており、小学校教員志望者のうち1名のみが「あまりない」と回答した。

4.3 小学校英語の目標

表2は、教科としての「外国語(英語)」の目標として重視するものを、複数回答可として回答してもらった結果である。

表2 小学校英語の目標

小学校英語の目標	人数(%)
1. 英語コミュニケーション能力(特に聞くこと・話すこと)の養成	57(80.3)
2. 外国語への慣れ親しみを増す	52(73.2)
3. 異文化への理解を増す	42(59.2)
4. 英語コミュニケーション能力(特に読むこと)の養成	12(16.9)

4.4 小学校英語の評価

表3は、教科としての「外国語(英語)」において小学生の英語を評価する際に、最も重視する観点を、自由記述で回答してもらった結果である。

表3 小学校英語の評価観点

小学校英語の評価で重視する観点	人数(%)
1. 積極的に英語を使う意欲・伝えようとする姿勢	39(54.9)
2. 授業参加姿勢・意欲	12(16.9)
3. 英語コミュニケーション能力	12(16.9)
4. 間違いを恐れない態度	3(4.2)
5. 知識	2(2.8)
6. 英語を使う自発性・主体性	2(2.8)
7. 外国語・文化への姿勢	1(1.4)
8. 子どもの英語を評価しない	1(1.4)

表3が示すように、大きく分けて8種類の回答が見られるが、「積極的に英語を使う意欲・伝えようとする姿勢」(39名)、「授業参加姿勢・意欲」(12名)、「間違いを恐れない態度」(3名)、「英語を使う自発性・主体性」(2名)、「外国語・文化への姿勢」(1名)の計57名(80.3%)が児童の意欲や姿勢を評価の最重要観点としている。

以下はグループ別に分けた回答者の自由記述の回答である。

積極的に英語を使う意欲・姿勢

- 積極的に英語を使おうとしているか
- 積極的に英語を使っていること
- 英語を積極的に活用しようとする態度
- 積極的に英語を話そうとする姿勢
- 積極的に考え、伝えようとする姿勢
- 積極的に英語を話そうとしているか
- 積極的に「伝えよう」としているか
- 積極的にコミュニケーションをとろうとする姿勢
- 積極的に英語をつかえているか、学習前と比べてどう成長したか。
- 自ら進んで英語を使おうとしているか
- 前向きに英語を学ぼうとしている姿勢
- 英語に親しみを持って、積極的に話そうとしているか。
- 英語に慣れるためにも、積極的に英語を使おうとすることが最も重要だと考える。
- 英語を使おうとする姿勢
- 英語を用いて表現する姿勢
- 英語で伝えようとする意欲
- 正確かどうかはさておき、聞き取ったり話した

りしてコミュニケーションを取ろうとする姿勢。

18. 話そうとする意欲
19. 英語を使おうとしている姿勢
20. 伝えようとする姿勢
21. 聞き取ろう、伝えようとする意識
22. 英語に向かう姿勢がみられるかどうか。
23. 英語に親しむ姿勢
24. 英語を使って、伝えようとしている態度です。
25. 間違っている、英語を楽しく使ってみようとする姿勢を評価したいです。
26. 単語や発音も大事だが、やっぱり伝えようとする態度を重視したい。
27. 間違っている、あっても、頑張って英語を使おうとするやる気を評価する。
28. 表現したり伝えたりしようとする姿勢
29. 自分の言葉で伝えようとする意欲
30. 英語を使って対話を試みる姿勢
31. コミュニケーションを取ろうとする意欲や態度
32. 英語を頑張って伝えようとしているか、そしていかに伝えようとしているのか。
33. 正しいかどうかではなく、楽しく、積極的に話そうとしていたり、英語に興味を持っていることを重視したい。
34. 話せているかや、書けているかではなく、話そうとしているか、書こうとしているかというところが最も評価する点だと思う。
35. 自分の伝えたいことを伝えようとしたり、相手の言っていることを理解しようとしたりしているかどうか。
36. 自分の持てる語彙力で積極的にコミュニケーションを図ったり、自分を表現しようとしているか。
37. 文法的に正しい英語を使うことが出来なくても、自分が持っている知識を最大限活かしたり、表情やジェスチャーを用いたりして、どうにかして英語で自分の考えや意見を伝えようとする態度。
38. 英語を使うのではなく、自分の伝えたいことを伝えるためのツールとしての英語となっているかどうか。(具体的には、英語での言い方がわからない場合でも、今持っている英語の知識を使ってジェスチャーや表情も用いながら伝えること。)
39. 自分が知っている語句や表現などを使って、相手に伝えようとしたり、積極的に相手の話を聞き取ろうとしたりしていること。

授業への参加姿勢・意欲

1. 積極的に授業に参加しているかどうか。
2. 積極的に参加しようとする態度。
3. 英語の授業を楽しんでいるか。
4. 楽しんで授業に挑んでいる。
5. 楽しんでいるかどうか。
6. 英語学習を楽しむこと。
7. 意欲態度
8. 積極性と意欲
9. 積極性
10. 意欲
11. 英語を用いてのコミュニケーションに価値を感じ、楽しんで授業に取り組んでいるか。発音や文法の正確さよりも、今自分が持っている力で工夫して伝えようとする姿勢などの授業への積極性を評価したいです。
12. 出された課題に対して目的・場面・状況を理解して取り組もうとする姿勢だ。小学校英語では文法指導を行い英語力を高めていくのではなく、英語を使用し慣れ親しんでいくことが大切であると思うので、上記のように考えた。また単に課題に挑もうとするのではなく教師の示した目的・場面・状況をしっかりと把握し、課題に臨む姿勢が大切である。そのうえでできる、できないは私の指導がだめな部分もあると思うので、皆が平等にできる姿勢を最も重視したい。

英語コミュニケーション能力

1. 英語コミュニケーション能力(聞くこと・話すこと)・伝える力
2. 英語コミュニケーション
3. 実際の生活場面で英語を使ってコミュニケーションする力が身に付いているかどうか。
4. 「会話」としての英語コミュニケーション能力
5. コミュニケーション能力
6. 英語を使ったコミュニケーション能力
7. 相手に伝えようとする力
8. スピーキング能力
9. 「話すこと」
10. 話す力
11. 伝わったかどうか
12. 言語活動

間違いを恐れない態度

1. 間違いを恐れずに発話できているか。
2. 英語に苦手意識を持たないこと。
3. 苦手を感じさせない。

英語を使う自発性・主体性

1. 子どもが自発的に英語を使っているかどうか.
2. 児童自ら書いたり, 読んだりするなど, 主体的に授業に取り組んでいること, 自分なりの表現をしていること.

知識

1. 基礎知識の定着
2. 重要表現を使いこなす

外国語・文化への姿勢

1. 外国語や外国の文化に積極的に関わろうとしているかについてです.

子どもの英語を評価しない

1. 小学校英語に限っては, 子どもを評価したくないと考える. 子どもが英語を楽しんでいるかどうかを観察し, それを通じた自分の授業の評価の方を重視したいです.

4.5 小学校教員志望者への調査結果

4.5.1 小学校英語への積極性

将来の進路として小学校教員志望と回答した40名に, 小学校英語に積極的にかかわりたい気持ちがあるかという質問をした. 表4が示すように, 「大いにある」と回答した学生が15名(37.5%), 「少しある」が20名(50.0%)であった. 一方, 小学校英語に消極的な「あまりない」が4名(10.0%), 「まったくない」が0名(0.0%), 「無回答」が1名(2.5%)であった.

表4 小学校英語への積極性

	大いにある	少しある	あまりない	全くない	無回答
人数	15	20	4	0	1
%	37.5	50.0	10.0	0.0	2.5

小学校教員志望者40名のうち35名(87.5%)が小学校英語に積極的な姿勢を示している点については, 指導者としては安堵したところであるが, 「少しある」と答えた回答者は積極的とは言えず残念な面もある. 次に報告する小学校英語指導への不安がその大きな原因と思われる.

4.5.2 小学校英語指導への不安

小学校教員志望と回答した40名には, 小学校での英語の指導について, 不安を感じているかについても尋ねた. 表5が示すように, 「大いにある」が19名, 「少しある」が19名の計38名(95.0%)が小学

校英語の指導に不安を持っていると回答した.

表5 小学校英語指導への不安

	大いにある	少しある	あまりない	全くない	無回答
人数	19	19	1	0	1
%	47.5	47.5	2.5	0.0	2.5

小学校教員志望者で, 積極的に小学校英語にかかわることを希望している学生でも, ほとんどが指導に不安を感じている.

指導に不安を持っている場合, どのような点に不安があるか, 自由記述で回答してもらったところ, 表6が示すように, 4種類に分類できる.

表6 小学校英語の指導に対する不安要因

指導に対する不安要因	人数(%)
1. 自分の英語力に対する不安	28(70.0)
2. 子供への英語指導に関する不安	5(12.5)
3. 英語の指導法に対する不安	5(12.5)
4. 小学校英語の経験がない不安	2(5.0)

英語力に対する自信のなさ

1. そもそも英語が苦手で, 大学でもそんなに学習していないため, 正しく教えることができるのかが不安である.
2. 自分自身の英語力にまだ不安があり, 小さなニュアンスの違いなどをきちんと説明できるか不安.
3. 小学生に伝わる英語で話すことができるか. 適切な発音で指導することができるか.
4. 自分の英語力が足りているのか.
5. 英語が得意ではないため, 英語がすらすらと出てこない.
6. 自分の英語力がそこまで高くないので児童に教えられるのか.
7. 私自身が英語を話す聞くことが上手くないから.
8. 流暢な英語を話すことや, ALTの先生とのやり取りに少し不安があります.
9. 自分自身の英語力をもって子どもたちに指導することができるかどうかとても不安です.
10. 自分の英語力が不安です.
11. 英語がそこまで得意ではないので, 勢いで授業をしてしまって, 現在子どもたちに求められている力を伸ばすことができないかもしれないという不安があります.
12. 自分の英語の語彙や発音が拙い.

13. 英語を話すこと。
14. 発音に自信がない点です。
15. 自分の英語に自信がないため、それが児童にも影響するのではないかと不安に思います。
16. クラスルームイングリッシュなど英語を十分に使いながら授業が出来るのか、また間違っただ表現を使ってしまわないかなどの点で不安です。
17. 自分の発音自体にあまり自信がない
18. 自分の発音に不安があります。
19. 発音や文法的な正しさ、綺麗さ。
20. 自分の英語の実力が子どもたちに教えるほどのものであるか。
21. 私が英語話せないのに指導していいのかという点。
22. 教師が子どものお手本となる英語を話さないといけないので、表情、抑揚、発音などに不安がある。
23. とっさに英語が出てこない点、自分の英語の発音や使い方が間違っていないかという点、ALTとのコミュニケーションがうまくいくかどうかという点。
24. 外国人の先生との会話が特に不安です。
25. 適切な英語を話せるか。
26. 自分の英語に自信がないため、それが児童にも影響するのではないかと不安に思います。
27. 自身の英語力
28. 自分が英語に苦手意識を持っていることもあるので、臨機応変に対応できるかという点。

子どもへの指導に関する不安

1. 小学生に必要な知識を楽しく教えることができるか。
2. 英語の授業＝テンションが高いというイメージがある。どうしても英語を使うときは、日本語を使うときとテンション感が変わるような気がしてしまい、このテンションの差が学級経営等にどう影響していくかが不安である。
3. もともと習っていたりして学習が進んでいる児童にも何も知らない状態の児童にも、どちらにも適切に英語を教えられるかという点。
4. 英語に対して苦手意識を持っている子どもが多い中で、その意識をどうやってなくしていくのか。
5. 子ども達が主体の授業を作り、子ども達から話や意見を引き出せるような働きかけを行うことができるのかという点。

英語授業実践に対する不安

1. 「児童の能力+1」の指導をすると、児童の英語スキルを上げることが出来ると言われたが、児童の能力を適切に把握したり、それをもとに少し難易度の高い学習になるよう計画したりすることができるのか少し不安である。
2. まず、授業の進め方を明確に把握しているわけではなく、単元や活動内容について様々な工夫が必要だと思うため、経験がないことに不安を覚えています。
3. 単元を繋がりよく進めることができるか。
4. うまく指導できるかどうか。
5. 英語科ならではの特色を出せるかどうかという点。

小学校英語の経験がない不安

1. 自身が英語科の授業を小学校時代受けたことがないことから経験を生かせることが少ない点。
2. 自分が受けてきてない分、どんな授業をしたらいいのか。

5. 考 察

5.1 小学校英語の目標について

教科としての「外国語（英語）」の目標として重視するものの第1に、「英語コミュニケーション能力の養成」があげられるが、特に「聞くこと」・「話すこと」の音声面の習得を重視する回答が、57名（80.3%）で一番多かった。次に、「外国語への慣れ親しみを増す」が52名（73.2%）、「異文化への理解を増す」が42名（59.2%）と続いている。「英語コミュニケーション能力の養成」のうち、特に「読むこと」とした回答数は12名（16.9%）だった。また、「その他」の目標を自由記述で回答可としたが、その他の回答はなかった。

平成29（2017）年改訂小学校学習指導要領（文部科学省、2018：67-74）には、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す」とあり、小学校外国語科の目標として、

1. 知識・技能の目標、2. 思考力・判断力・表現力等の目標、3. 主体的に学習に取り組む態度の目標として次の3点があげられている。

1. 外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違

いに気付き、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。

2. コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う。
3. 外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

調査対象者の回答は、現行学習指導要領が示す目標から逸脱しているわけではないが、特に英語コミュニケーション能力のうちで「聞くこと」、「話すこと」の養成に重きを置いていることが顕著である。調査回答者は、現行学習指導要領で示されている「コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力」の構成要素について理解しているはずであるが、自身の経験からか8割の回答者が「聞くこと」、「話すこと」の習得を小学校英語の最も重要な目標ととらえているようである。

5.2 小学校英語の評価について

教科となった「外国語（英語）」では、児童の英語力の評価も求められているわけであるが、知識や技能の評価を重視した回答は、「英語コミュニケーション能力」（12名）、「知識」（2名）の計14名（19.7%）にとどまった。小学校教員志望者40名の中では、知識や技能の評価をあげたのはわずか5名（12.5%）であった。

名畑目（2021）は、小学校英語の評価では、児童が英語を学び始めた段階であること、中学校以降の学習に動機づけを与えることを踏まえ、特に「学習のための評価（assessment for learning）」の重要性を述べている。

調査回答者の8割ほどが、「英語を使う姿勢、学びに向かう態度」を最重要にしている姿勢は、小学校教員として問題ないと思われるが、積極性を重視し、英語に関する知識や技能がどれだけ定着しているかについての評価に消極的すぎるのは問題である。このように教員養成課程の学生の意識の根底にある指導目標と評価目標に大きな差があることは、小学校教員に求められている指導と評価を避ける傾向に

あるということである。この意識は、現職の小学校教員にもおそらく同様に見られることが予想できる。

小学校教員が自信を持って安定した評価ができるようになるまでには、相当量の研修と経験が必要である。島谷（2016）は、テスト専門機関によって児童を対象として作成された英語能力テストの活用を提案した。それらの多くは、英語力の測定と同時に英語学習への動機付けとなることを目的としている。小学校での活用方法については注意が必要であるが、教師自作のテストに比べて信頼性、妥当性の面で安定しており、適切に利用すれば、学習者にも指導者にも適切な評価情報をもたらす、また指導者の悩みと負担を軽減できるであろう。

調査回答者のうち1名だけではあるが、小学校英語に限っては、子どもを評価したくないという回答があった。児童英語教育が進んでいる北欧諸国の事例であるが、ノルウェーでは、13歳までの児童は、公式にテストによる評価を受けていないと報告されている（Hughes, 2003）。デンマークでも小学校6年までは、のびのびと楽しく学ばせるためにテストがなく、成績表もないと報告されている（西尾, 2011）。島谷（2018）は、「小学校英語」については、評価情報の収集のみにして、評定をつけない選択を提案している。

5.3 小学校英語指導への不安について

実際に小学校教員を志望して、積極的に小学校英語の指導に取り組みたいと考えている調査回答者のほとんどが、その指導に不安を抱えているわけであるが、自身の英語力に対する不安は、特に発音、流暢に話す力、ALT（外国語指導助手）との会話に対する自信のなさ起因するものが目立った。さらに、児童への指導に関する不安、英語の授業実践力に関する不安、小学校で教科としての英語を受けたことがないという経験のなさからの不安があげられている。

不安要因のうちの「英語力」と「英語科授業実践力」は、中学校・高等学校の英語科教員に求められている専門性である（山森, 2021）。小学校英語を指導する教員が、中学校教員と同様の英語力を有することは理想的ではあるが、現実的ではない。小学校英語の指導者に求められている資質・能力として、大里（2021）は、次の4点を挙げている。

1. 学級の実態に合わせた授業計画を作成することができる
2. 英語学習の雰囲気づくりをすることができる
3. 教科化に対応した専門性を高めるための自己研鑽をすることができる

4. ALT や英語が堪能な地域人材と協力することができる

小学校教員には、英語を学習者としてのモデルとなることが期待されているが、英語発音の模範となることまでもが要求されているわけではない。児童に標準的な英語の音声や正確な発音を習得させるために、ALT や英語が堪能な地域人材の活用が奨励されているが、教員養成課程の学生の多くが、授業内のALT との会話などに不安を感じすぎている。

現在の小学校英語の指導は、学級担任が指導する場合と専科教員が指導する場合がある。中央教育審議会において小学校での教科担任制の導入が議論されているようであるが、小学校英語の指導体制が今後どのようなようになるかは不明である。

これからの小学校英語教育を担うと目される教員養成課程の学生の意識の根底に「自分の英語力が子どもたちに教えるほどのものであるか」という不安を抱えている事実は認識しておく必要がある。

5.4 小学校英語の評価への提言

新学習指導要領の実施により、観点別評価（観点別学習状況の評価）も変わり、全教科において、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の共通した3観点で評価されることになった。教科となった小学校英語も他教科と同様に評定がつくことになり、教員は研修を受けたり、国立教育政策研究所教育課程研究センター（2020）の「参考資料」を参照しながら観点別に評価し、評定をつけているようである。

評価の観点が、全科目で共通になったことでわかりやすくなったように思われるが、外国語（英語）における「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」で評価対象となる能力が具体的にどんなものなのかについての戸惑いを感じている現場教員は多いようである。指導と評価の一体化がより重視されている新しい評価について、幡井（2011）は、小学校における「思考力・判断力・表現力」の指導と評価の事例を解説し、直山（2011）は、小学校英語の指導と評価の実践事例の詳細を紹介し講評している。

小学校英語にまじめに取り組む教員ほど、評価内容の細かな差異を意識しすぎて大きな負担となりそうである。また、評価内容が教員ごとに大きく異なっていく可能性が懸念される。小学校教員に大きな負担をかけない指導と評価に向けた方策が検討されるべきであろう。

おわりに

小学校教員免許の取得を目指す教員養成課程の学生に対するアンケート調査の結果、回答者の95%が、教科としての「外国語（英語）」の導入に対して肯定的であった。小学校英語の目標の第1に、「英語コミュニケーション能力の養成」をあげ、特に「聞くこと」・「話すこと」の音声面の習得を重視する回答が57名（80.3%）で一番多かった。評価については、回答者の8割ほどが「英語を使う姿勢、学びに向かう態度」を最重要にしており、児童の英語に関する知識や技能についての評価には消極的であった。

児童の英語力の評価への消極的な姿勢は、主に自身の英語力に対する自信のなさに起因しているようである。英語科教員に求められている専門性の1つである英語力は、小学校教員に求められているわけではないことについては教職科目の講義を通して理解しているはずであるが、小学校教員志望者は、自身が持つ理想の英語指導者のイメージと現実のギャップに悩んでいるようである。意識の根底にある指導目標と評価目標に大きな差があるために、求められている指導と評価を避けてしまうのは大きな問題であろう。

小学校教員の戸惑いや不安を解消する研修の機会の充実と、小学校教員に大きな負担をかけずに充実した指導と評価のための方策が検討されることが望まれる。

参考文献

- 大里弘美（2021）。「Q61 小学校外国語の指導者に求められる資質・能力とは？」『新・教職課程演習第12巻 初等外国語教育』名畑目真吾・松宮奈賀子（編著）pp. 194-195. 東京：共同出版。
- 国立教育政策研究所教育課程研究センター（2020）。「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料 小学校外国語・外国語活動』 https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/hyouka/r020326_pri_gaikokg.pdf 2022年8月19日閲覧
- 島谷浩（2016）。「子どもの学習者の言語力の評価」『日本語テスト学会誌（20周年記念特別号）』, 19, 165-167.
- 島谷浩（2018）。「小学校英語教育の目標と評価方法に関する考察」『熊本大学教育実践研究増刊号』, 75-78.
- 直山木綿子（監修）（2021）。「『小学校外国語教育の指導と評価』文溪堂。
- 名畑目真吾（2021）。「Q31 小学校外国語科における評価の課題とは？」『新・教職課程演習第12巻 初等外国語教

- 育』名畑目真吾・松宮奈賀子（編著）pp. 106-107. 東京：共同出版.
- 西尾由利子（2011）. 「世界一しあわせな国デンマーク 話し合い重視の英語教育」『小学校の英語教育』河原俊昭・中村秩祥子（編著）pp. 92-111. 東京：明石書店.
- 幡井理恵（2021）. 「Q4 小学校では「思考力・判断力・表現力等」をどう評価すればよいですか？」『英語教育』69（12）, 16-17.
- 文部科学省（2008）. 『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』東京：東洋館出版社.
- 文部科学省（2018）. 『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説外国語活動・外国語編』東京：開隆堂出版.
- 山森直人（2021）. 「Q53 英語科教員の専門的能力とは何か説明しなさい」『新・教職課程演習第18巻 中等外国語教育』卯城祐司・榎葉みつ子（編著）pp. 186-189 東京：共同出版.
- Hughes, A. (2003). *Testing for Language Teachers*. 2nd Ed. Cambridge: Cambridge University Press.